

1960年代ジャンク箱

J A 1 W O B 齋藤章

アマチア無線を始めた、1960年代は終戦から15年が経ち、一般家庭の娯楽は、ラジオからTVに移り替わる頃でした、TVの歌番組は、アメリカのポピュラーソングを翻訳した曲を日本人歌手が歌う、ザ・ヒットパレードやシャボン玉ホリデーなどで放送されていました。

ドラマや映画もアメリカの映画を日本語吹替えで放送していました。

西部劇映画も多く、ララミー牧場、ローハイド、拳銃無宿などがありました。

その映画解説は「さよなら、さよなら」でのセリフ有名な淀川長治さんでした。翌日の小中学校では、「さよなら、さよなら」の、もの物まねする生徒が必ずいました。

その頃、小学生だった私は、お年玉を貯めて回転式拳銃のコルト45のモデルガンを買って西部劇ゴッコをしていました。

小学生のお年玉で買えるモデルガンは安物のプラスチック製なので重量感がなくて、重量感のある金属製のモデルガンに憧れていました。

戦争映画のコンバットやギャラントメンなどでは、司令部と小隊との間の無線通信が恰好良くで、友達が持っていた27MC超再生？のトランシーバーを借りて、「チェットメイトキングツー、こちら、ホワイトロック、どうぞ」とやって満足していました。

その頃は、なんでもアメリカ映画に憧れていて、アメリカ大好きでした。

つい十数年前まで戦争をしていた国の印象はありませんでした。

「団塊の世代」という言葉が出る前の時代で、われわれベビーブーマーは「現代っ子」と呼ばれていました。

高校に入学した64年にアマチア無線を本格的に知りました。

木箱で出来たST管のラジオは、ゴミとして多く出されていましたから、ゴミとなった並4球や5球スーパーラジオを拾い集めては、アマチア無線用の受信機等の部品取りをしていました。

受信機や送信機を作る為には、アルミシャーシに穴を空けて、トランスや真空管、VRなどを取付けました。

その頃に使った、ハンドドリルやリーマー、シャーシパンチなどが、工具箱の中にはまだあります。

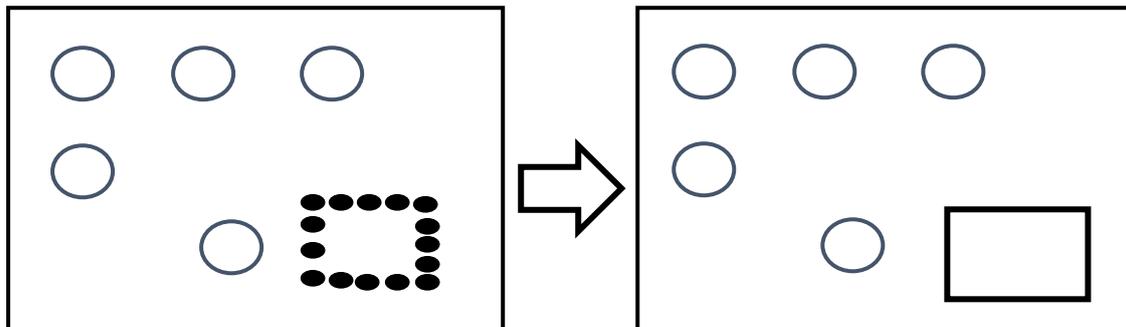
トランスの穴開けが一番大変でした。



四角い穴を空けるため、ドリルで穴を何個も開けてそれをニッパーやヤスリで切り取り、更にヤスリで成形して、トランスの電源端子がシャーシ内側に出る様にします。

下図の○は真空管の穴で●はトランスの穴を空けて□の様に整形する。

5球スーパーのシャーシ構成です、



また、このハンドドリルで、トリオの受信機JR-200の2mm鉄板シャーシに穴を空けて中間周波数トランスを1個追加して、高1中1を高1中2に改造しました。ハンドパワーで何でもやりました。

真空管の穴は、始めに4mm位の穴をドリルで空けて、リーマーで6mm位に広げて更にシャーシパンチで穴を空けました。

シャーシパンチは、ST/GT管用、MT管9ピン用、7ピン用の3種類がありました。

なぜか、7ピン用が無くなっていました。

シャーシの穴空けが終ると、製作工程の3、4割まで進んだので一息します。

真空管のソケットや、トランス、スイッチボリューム、バリコン、パイロットランプや入出力のコネクターを取付ける、といよいよ配線を開始します。

製作初期の頃は、配線図と実際の部品との関係が良く分からず、実態配線図が有る、「初歩のラジオ」誌にあった製作記事を参考にして作りました。

2、3個作っている内に回路図と部品の関係性を理解して来る様になると、回路図があれば何でも出来る様になりました。

また良く使う真空管のピン番号は暗記していました。低周波増幅双三極管の12AX7の9ピンは1から(P, G, K, H, H, P, G, K, H)の順は今でも覚えています。

カッコ内の記号が何だか分かりますか!?

配線が完了して、電源SWを入れる時は、いつも緊張したものです、煙が出ないか、火花が出ないか、変な匂いがしなしか、変な音がしなしか、全神経を集



中して、電源SWは何時でも切れる様に、指を触れておきました。
無事に閉門を通過しても、正常に動作しない場合も多々ありました。
配線ミスや半田が不十分だったり。また、ジャンク品を使う事が多いので部品の不良等もありました。

トラブルが発生した場合には、目視で配線や半田状況をチェックして、次にはテスターで、電源の電圧や電流をチェックしました。

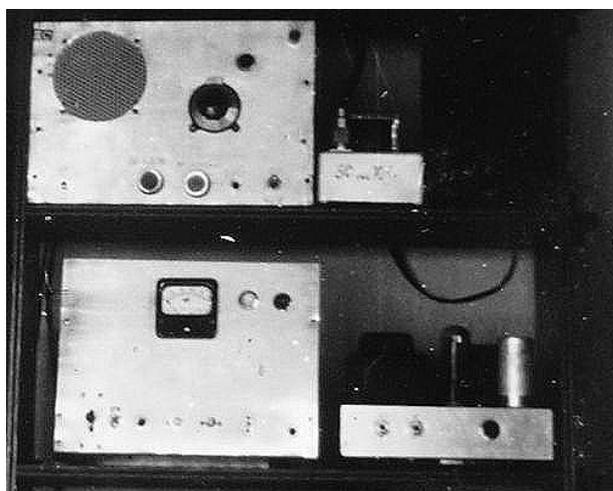
50年以上前の日置のテスターを今も使っています。

電圧のレンジがACとDCとも1000V, 500V, 250V, 50V, 10Vです。
電流は500 μ A, 10mA, 250mAと真空管時代のレンジです。

70年代に三和のミラー付きテスターを買ったのですが、何かの誤操作で壊してしまい、この日置のテスターが残っています。



下の写真は、ST管のBC帯5球スーパーをハム用受信機に改造したものです。前面をアルミパネルにしてバーニヤを付けて通信機らしくしています。



その横に有るのは50MCクリコン？
その下は、6AR5で作った送信機で周波数は不明です。

その横にあるのは電源の様です。
作っては壊していた機器用に万能電源を作っていました。

トランスの穴空けが大変だった為と思われます。

自作の無線機は出来上がっても、常に正常に動作しないので、調整や改造の日々でした。

開局する時の送信機の部品は、秋葉原へ新品の部品調達に行きました、鈴蘭堂で調達した、リードのAS-2のケースを使用した、立派な送信機でした。
トランスや送信管などは、昔し、お隣りどうしたった、トヨムラやロケットで調達していました。コネクターやバリコンや真空管ソケットは、立川の羽衣町にあった、ジャンク屋の「杉原商会」から調達していました。
最近まで、営業していた砂川町の「杉原電子」とは別の場所です。
ジャンク箱を覗いてみると、60年代から集まった部品達が出てきました。

主に使っていたMT管の真空管は、使う事も無いので処分してしまいましたが、恰好の良い大きな送信管は飾りとしても良いので保管していました。写真は、右から 832A, 2B52, 6JS6 です真空管のソケットが無いので、発砲スチロールに差し込んで、保管しています。



6146 や 2E26 や 6L6GB などは送信機に取付けたまま処分してしまいましたので、有りません

次に今日ではほとんど見る事の出来なくなった、バリコン類でみんな大きくトリマーでさえ大きくて肉眼でも良く見えます。

最近のトリマーは豆粒みたいで、くしゃみでもしようものなら飛んで行きそうです。真空管時代は何でも大きくてブラックボックスも無いので、無線機の仕組みや構成が良く分かりました。

数年前に FT-817ND の 7Mhz の拡張バンドに対応する為に、チップコンデンサーを外すのに、視力が年相応なので大変苦労しました。



真空管時代に、コンデンサーを外す位は片目を瞑っても出来たのにと思いました。写真のバリコンやトリマーは、当時は 50MC の無線機を主に製作していましたから、ステアタイトのバリコンやトリマーがジャンク箱から出てきました。

次に無線機の前面パネルに使用する、スナップスイッチや、シーメンススイッチです、スナップスイッチは電源やモードの切替など、頻繁にオンオフしない用途に使い、シーメンススイッチは、受信切替、キャリブレ、送信切替する用途によく使いました。

パイロットランプは、6. 3V のヒータ電源を利用して、点灯していました。私の場合、電源オンで「緑ランプ」キャリブレで「黄色ランプ」送信で「赤ラ

ランプ」の交通信号の様な色で作りました。

ジャンク箱にあった、ランプホルダーは、赤と緑で残念ながら、黄色は在りませんでした。



そして、真空管のソケットや同軸コネクター、ラグ板などを止めるビスやナット類は、60年代当時に姉から貰った、キャンディーの空き缶に入れていたものを50年以上経過しても使っています。



前面パネルに取付ける、取手とアンテナ用の波型碍子も出て来ました。波型碍子はダイポールやロングワイヤーなどに使いました、卵型碍子も何年前に見た事はありましたが、現在は在りません。



まだまだ、有りますが、真空管に関する、ジャンクはこの辺にしておきましょう。次回は、70年代になってからのトランジスタ関連のジャンク箱を紹介したいと思います。

つづく